

「復興ワードマップ研究会」(第1回) 2017年10月20日

出席者：近藤誠司・宮本 匠・木戸崇之・石原凌河

・「復興」をアカデミックに検討する際においても、実践を進める上でも、そろそろ、巷間に氾濫している“プラスチックワード”の内実(射程距離や系譜など)を煮詰めておく必要性を感じる。たとえば、「減災」という言葉。マスコミで流布しはじめたのは、阪神・淡路大震災から8年目を迎えるころだったという印象がある。『NHK スペシャル』のメインタイトルで初めてお目見えしたのは、震災8年目の番組だった。当時は、まだ違和感もあり、このことばを敢えて使用すべきか、NHKの内部でも慎重に議論していた。

・東日本大震災以降、気になっている言葉としては「きずな」がある。その実体がともなっていないのに、いやだからこそなのか、ことばに託して無理やり運動をプロモートしようとしている気配がある。お仕着せの印象がある。新潟県中越地震のころは、すでに「きずな」フィーバーだったような記憶がある。しかしそもそも、だれとだれの、どのような「きずな」を指しているのか？

・復興／再生／再建、このあたりのことばたちのニュアンスも気になる。テレビのヒューマンドキュメンタリーで「復興」という言葉を使用することはあまりない。なぜなら、「復興」ということばは、経済的な、もしくは行政的(管理的)なおおいがするから。だから「こころの復興」ということばには、うさん臭さもある。ところで、こうした議論は、このままだと印象論、単なる“居酒屋談義”で終わってしまう。エビデンスを探しながら、ことばの系譜と射程を見定めていく研究会にしなければならない。たとえば、具体的なエピソードをあらためて集めるとよいだろう。「復興」は、神戸の人たちはかなりネガティブに使っていたふしがあるが、新潟では「復興」ということばを使って、取り組みをドライブさせていた。運動論的に敢えて使っていたと感じている。

・「創造的復興」ということばの系譜をたどる必要もある。これは、当時の兵庫県知事のことば遣いを振り返ってみても、相当に“振れ幅”があったように感じている。新潟県の「創造的復旧」、この言葉も、結局は、運動論として出てきているのではないか。かけひきの中で出てきている、ポリティカルなことばと位置付けることができるかもしれない。ことばが生まれた、もしくは使用されたその文脈を、まずはそのままのかたちで摘出しておきたい。もしくは、“違和感”をうまく抽出しておきたい。現代日本社会における「レジリエンス」、「強靱化」ということばなども、とても気になるワードだ。

・「復興バネ」。人／制度／カネ／気持ち、など、当てはめ方が、時と場合で異なっているようだ。しかしこのことばは、新潟の支援者・関係者の中では、ピンとくる言葉にな

っている。災害に遭ったからこそ沸き立つチカラがあることを、このことばはうまく言い当てている。やはり、ことばの文脈に注視しなければ議論が空中戦になってしまう。ことばそのものを抽出してピュアに議論をしようとしても無理があるだろう。

・ここ5年くらいで、「復興」という言葉に飽きてきている自分がいる。しかし、起きている現象や事態を、そのときにしっかりとことばで明示することなしに、次々と（中途半端に）その状況をやりすごしてきたことはよくなかった。混乱や矛盾は、次の災害で、かならず「あっ」と思うかたちで舞い戻って来る。やはり、言語化しておかないといけない。阪神・淡路大震災10年までは、「復興」と言えた。何を指しているのか、まだ（メディア内で）イメージできていたふしもある。それがだんだんと被災地だけのローカルな話題、経済に関する限られたテーマというふうに、停滞・収束・縮減していった。日本社会全体が、不況、人口流出、少子高齢化、様々な難題を抱えているので、「復興」ということばに引っ掛けて物事を深く追求することが、うまくなしえていない。しかし、新潟中越地震までは、手ごたえがあったはず。ところが、東日本大震災で、“がらがらぽん”になったのではないだろうか。もはや、大前提がくずれてしまっている。そもそも生活再建が出来ていないこの底抜けしたような事態を、どのようにことばで腑分けするのか。あちこちの現象に対することばの当てはめ方が雑すぎる。うまくことばで掬えていながら、ひとびとを苦難から救えていない。大事なキーワードの持つチカラ、必ずそれは平時の何か（課題、アポリア）に根底的につながっているはずだという確信がある。災害だけという狭い見方にはもはや限界があることを、われわれは知っている。人間一般に関する知見の蓄積。そのためのことばとは？

・「Build back better」が、イコール「創造的復興」と言っている論者がいる。これは、正しい理解だと言えるのか？ Build back better は、もう20年も前に、「開発」の分野で使われていた手垢が付いたことばであると聞く。その後、このことばは、どのような変遷をたどっていったのか。

・「コンパクトシティ」って何なのか？ どういう豊かさを生むのかという視座で、もっと議論しなければならないのでは？ 効率性の原理、たとえば具体的には過疎地の豪雪処理などの現実をふまえて、すでに東日本震災の前から議論してきたことだったはず。十津川村のような「二地域居住」の考えも、今後さらに重要になってくるのではないか。こうして話していくと、キリがない。議論が拡散してしまう。多くの（雑多な）ことばたちを、「復興の木」のイメージなどでまとめられるかもしれない。

（了）